
アインザッツの不在証明

泰然寺 寂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アインザッツの不在証明

【Nコード】

N24550

【作者名】

泰然寺 寂

【あらすじ】

駆け抜ける青春！ 見切り発車オーライ！*人種や価値観についてデフォルメして描かれたシーンが含まれます。ご注意ください。

序

序

集団で帰らなかったことを後悔した。

駅の裏手にある地下道を通って改札横へ出ると、そこは戦場だった。既に血も流れている。泡立つ熱気が肌を撫でた。夏の日差しだけが問題ではない。まわりつく熱は生きているようで、浮き上がる汗の中にも潜んでいるようだ。この熱は感染する。耳を聳る声にめまいがした。アラブのスカーフたるシエマグで顔を覆いテロリスト然としている中高生が、大陸系の移民を襲っていた。制服を着た集団は手には金属バットや鉄パイプ、木刀に特殊警棒といった出入り用も甚だしい武装で身を固めている。悲鳴や怒号をかき消すように笑い声が木霊して駅前のロータリーに響く。

いつもなら客待ちのために何台も止まっているタクシーの姿が見えない。暴動が始まったのを見て場所を移ったのだらう。対して動くことの出来ない店ではできるかぎり被害が来ぬよう息を潜めているように見えた。ガラス張りのカフェはカーテンを引いている。本屋にいたっては客がいないことをいいことに閉店を装っていた。駅ビル二階のレンタルビデオショップは店員が数名外へ出て、手すりから眼下の暴動を傍観している。時折顔を見合わせるのは飛び火するかどうかの話し合いかもしれない。

移民の一人がよるめいて体勢を低くした。手で頭を覆っているが、そこへ無情にも高く掲げられた特殊警棒が振り下ろされる。ロータリーの地面からレンガ敷きの地面へと血が流れてきた。移民は動かなくなった。浮世絵風のイラストがプリントされているTシャツに赤が上書きされて、元は何が描かれていたのか判別できなくなる。倒れ伏した体を包み込むように流れ出した血に、移民は沈んだ。口元のわずかな呼吸が血の中で独り言のようで虚しい。倒れ込んだ移

民を何人もの制服が蹂躪する。返り血を浴びた制服を顧みもせず、逆に制裁を加えてやったという愉悦に身を委ねて次なる獲物へ高中生は駆けていく。彼らは幼い狩人だ。殺しのアマで暴力のプロだ。理性の枷とか知性の檻は、今この場で必要とされない。脳幹で思考しているのだろう。きつとそうだ。そして暴動が終わると何食わぬ顔で血に濡れた制服を着替え、テロリストの面を脱ぐ。理性の枷を嵌めて知性の檻に帰るのだ。そこに幼い狩人はいない。草食動物がいるだけとなる。

周囲に止める人間はいない。皆遠巻きに見つめるだけでキルゾーンたるロータリーの中へ踏み込む者は誰一人としていない。たぶん誰かが警察を呼んだだろう、気休めにそう思っただけで各々の目的地へ向かう。私だってそうだ。警察に連絡したところで、純血の日本人が電話口に出れば鎮圧と称して暴動に参加し、大陸系の人間が出れば同じく鎮圧と称して中高生を虐殺しにかかるだろう。だから、連絡はしない。中高生が飽きるか大陸系の移民が仲間を率いて逆襲し始めればじきに全ては終わる。

暴動と正常の境となっているアスファルトとレンガ。できるだけ離れて歩いているところへ、

「お前もついでに死んじまえ」

声よりも威圧感。殺気と呼んでも差し支えのないそれを前に、振り返りつつ後退する。今しがた私のいた場所に釘バットが振り下ろされていた。思い切り振り下ろしたせいでレンガの隙間に挟まって、釘バットは引っこ抜けない。釘には赤い物が付着している。いくつかひしゃげているところを見ると、バットの戦績が見えるようだ。鉄さびの匂いが鼻をついた。バットを抜こうとしながらも上目遣いでこちらを見る目は幼い。何か喚んでいるが声が大きすぎて言葉として認識できない。声からしても中学校に入り立て、そんな印象を受ける。彼が中学一年生とすれば私とは五年の開きになる。つい数ヶ月前は小学生だったのに。世も末だ。普通なら目上の、五年も離れている人間に襲いかかる奴なんていないだろう。だが、暴動の熱

気は人を内側から焦がしてしまう。火傷をした場所から、遠い昔の有識者が憎しみだとか負の連鎖だとか呼んだ何かが、全身へと広がってゆく。

というのは今考えたことなのだけれど。

中腰になつていているためちよつど良いところに頭がある。右足を持ち上げて、腰を軸にとか、そういう暴力の技術を無視した蹴りを鼻っ柱へお見舞いした。勢いのない蹴りはそれでも鼻に入ると靴底に骨が碎ける感触を与えた。ろくに重心も据えて蹴ったわけではないから、反動でよろけてしまう。顔の下半分を覆ったネイビーブルーのスカーフが見る間に赤く染まった。鮮血ではない。不健康そうな赤黒い色をしている。

意外な暴力の反撃にうづくまる中学生をロータリーの方へ送り返すべく、中学時代まで男子に混じってサッカー部で培ったPKの技術を活かした蹴りを頭へとお見舞いしてやった。女子の体力と体格ではPKでしか活躍できなかった分、それだけに自負心も強い。私は想像する。神聖さより見る者への娯楽として供せられる、決勝戦。国立の芝は均等に刈り揃えられて靴底に心地よい。自身とボールとキーパー。それだけの世界だ。想像の観客が遠のいていく。

左足を軸にして斜め下から突き上げるつま先が、右側頭部に突き刺さる。革靴で蹴ったために力は一点に集中せず、右足の親指の爪がめくられるような感触を受けた。中学生の髪の毛は意外に滑って眉を掠めて右足は飛び出した。一瞬遅れて顔が斜め上へ飛び出す。正確無比な物理エンジンとしての現実が音もなく猛った。顔の回転に追従するように首から下が一呼吸置いて回転し始める。地面から数十センチ上で、花開くように腕が広がった。腕と違い足は好き勝手に動き、もつれ、少し浮き上がったはいいが、体に先駆けて再び地面へと落下する。腰、左腕、胴、側頭部と順序よく落ちる様はビデオで撮ってスロー再生させたいぐらい。ロータリーに耳がぶつかって擦れ、血が出る。鼻血に続いての出血だが、蹴った側頭部及び落下した側頭部から血が出ていないのは不思議だ。頭に血が通って

いない証拠なのかも知れない。日本人であることを間違った方へ解釈してしまった結果だと思つて諦めて欲しい。中学生は二回目のバウンドで、ついさつき暴行されて血の海に沈んだ移民の隣に止まった。お似合いの血溜まりで共に呼吸する。独り言が二人分に増えた。幸いなことに他の暴動参加者は私の暴拳に気付いていない。気付かれていたら他の移民共々セルフ遊泳させられていただろう。泳ぐのも溺れるのも普通の海だけで十分だ。

腰からの回転を用いた会心の蹴りで乱れたセーラー服を直す。ゴムで止めるだけの簡単なりボンが横にずれている。手のフォロースルーがまずかったのだろうか。ついでに校章である胸バッジがどこかへ飛んで行つてしまったことに気付いた。が、後の祭りだ。危険を排して再び安全区域に戻った駅側から、ロータリーには出たくな。どうせ予備はあるし購買で買つても二〇〇円だ。三つの言語に一つの通貨。移民大国になつた日本が持つ最後の矜持だと誰かが言う。

サイレン音が近くなる。日本人か移民系か。どちらにせよ良識ある大人の出勤によつて暴動の群れは姿を消してゆく。いつの間にかロータリーには負傷者の影しか見えない。遮断機が上がつてタクシーがぞろぞろと戻つてくる。器用に倒れる人を避けて定位置で止まった。血溜まりの横で客を待っている。

いよいよ音だけのパトカーが姿を現した。参加者であると断じられる前に帰ろう。パスケースから三つの言語に彩られた定期券を取り出して、私は改札を抜けた。依然として救急車が到着する気配はない。

シヨートホームルームの時間にもなると、クラスに人影はほとんど見あたらなくなる。私を含め四人しかいないクラスに担任の教師はわざとらしく溜息を吐いて、あんなクズたちには絶対になるな、といったものセリフを吐いた。私たちが教師の言うところの「クズ」にこのことを言わないと知っているから言えるセリフだ。マトモというレットテルによって色分けされた人間に対するちよつとした優越感とも言う。

特段連絡らしい連絡はなく、五分ほどで 何もなくとも五分は拘束されるところに純血の日本人らしさが窺える ショートホームルームは終わった。現実から逃げ帰るように教室を後にする教師へ、私を除いた三人の小集団が小声で聞こえぬよう陰口をたたく。在日に言つてやろうか、あの教師、きつと死ぬよな。

机の横に下げたりリュックへ教科書類を詰める。置き勉をして教科書が無事であることはまずない。幸いにも私はいつも持ち帰るから被害にあつたことはないが、被害にあつた人の教科書たるや散々な物だった。詳述することすらしたくないほどに。

思いつつも学内において暴力事件が発生しないことはまさしく不幸中の幸いで。途中で学校から抜ける人は大抵外で何かしら暴力に携わつてはいるのだけれど。

教室後部のドアからリノリウム張りの廊下に出る。廊下を中心にして両脇に教室が並ぶため、廊下に直射日光が差すことはない。そのためか夏にもかかわらず随分ひんやりとしており、冷房も付いていないのに教室と遜色ない涼しさだ。廊下に人影は少ない。それはもう突き当たりにある姿見に映つた私の姿を見ることが出来るくらいに。

姿見をやり過ぎすと階段がある。古い校舎だ。二次大戦が終わったあと直ぐに作られたのだ。建て直しがされたりしているとはいえ風格という名のボロさを兼ね備えている。ひびの入ったコンクリートには水滴が付いて、蛍光灯は肺病患者のうわごとみたいに明滅する。滑り止めは積極的に滑落を狙っているかのような摩滅具合だ。用務員の努力も虚しく高い位置にある磨りガラスは曇っていて、既に壁の一部にも見えた。

降りてからの昇降口へと向かう廊下で後ろから声を掛けられる。振り返れば殷がはにかみながら走ってきた。後ろへ撫でつけられたオールバックがてかてかと輝いて、どこことなく機械的な雰囲気を出している。だからといって不快ではない。だらしくズボンの裾を引きずり、案の定私の手前で転けた。学ランがはだける。

「一緒にさ、帰ろうぜ！」

埃を払いながら立ち上がり、転けたという事実を打ち消すように殷は言う。廊下に他の人はいないが二階にも聞こえていると思う。それ以前に教官室へ届いているけど。不純異性交遊だとか難癖を付ける教師が移民系の暴動に巻き込まれて入院している今、咎める人がいないことは何からかは知らないが助かることだ。

「ヘルメット持ってきてるの？」

「当たり前。しかもピンク色。恥を忍んで買いに行った甲斐があったってもんよ」

下足箱ではなくリュックからビニル袋に入れた下靴を取り出す。下足箱に靴を入れないのは教科書と同じ理由だ。入学したてのころ、それで手ひどい目にあつた。以来私は下足箱を信頼していない。

駅前と同じでレンガ敷きの地面を歩く。急な傾斜の付いた坂を少し下ると正門だ。鉄製の門はひとり一人分開かれている。サイドカー付きのバイクが通れる程度に門を押し開いた。

門を出ると直ぐに、滋賀県から流れてくる琵琶湖疎水のために橋が架かっている。夏の日差しに照らされる欄干はすでに触れそうもない。こんがり焼き上がってしまう前に、葉桜が茂って影の出来

ている下り坂へと急ぐ。登校時は上り坂ばかりだが、下校時は逆に下り坂ばかりになる。

学校の名前が冠されている坂を下る。夏の光が葉桜に当って砕けた。道路の先に陽炎が立つ。右手に見えるテニスコートにはテニス部員の影はなくて、踏み荒らされたコートに煙草の吸い殻が落ちているばかり。破れたままに補修もされないネットが風に揺れる。テニスコートの奥にある背の高い時計は、いつかの四時で時を止めていた。

背後から重質量の物体が近づいてくる気配がした。エンジンを掛けていないサイドカー付きのバイクだ。そのバイクが何という名前か私は知らない。けれど黒光りをするそれは、おそらくアメリカにでも行かなければ到底馴染むことなどできないように思える。少なくともこの街に馴染んではない。

横付されたサイドカーに乗れ、と般は顎で示した。確かに座席にはピンク色のヘルメットが置いてあった。やはり不釣り合いに思う。指先で引っかけるようにヘルメットを取ると、空いたスペースに体を入れた。派手派手しい色合いのそれを被り、リュックは抱える。私がいっかりと乗ったことを確認した般は無造作にエンジンを入れた。

瞬間、蝉の声をかき消す爆音が轟いた。思いの外防音性能の高いヘルメットのおかげで鼓膜が破れるのをあわやというところで防いだ格好だった。般がこちらを見る。口の動きで何か言っているということは分かるが、読唇術が使えるわけでなし、意味も分からずただ適当にうなずいた。小さく小脇でガッツポーズを取ったところを見ると、やってしまった感がなきにしもあらず。

爆音と違って意外にも滑らかにバイクは走り出した。ひび割れたアスファルトの感触がシートを通じて近くに感じる。いつもより景色が一段低いせいか異様にスピードが速く感じられる。ヘルメットは暑く汗が滲み出る。対照的に顔へ吹き付ける風はどこか異国の風のように心地よい。

歩けば長い坂もバイクだとあつという間だった。平坦な道に出るともう一つ川があつて、そこへまた橋が架かっている。右手にグラウンドがあつて橋の向こうは住宅地。ここも一種の境界になっている。暴動が起きてても、滅多に学校の敷地内へは入ってこない。結界のようなものなのだろうか。橋を隔てて世界は違う。

昨日の暴動を思い出す。あの後血の海に沈んだ二人は、あの暴動で負傷した人たちはどうなったのだろうか。ニュースには「暴動が起きて多数の負傷者が出た」としか報じられなかった。暴動の熱が去った後の駅はとても静かで、まるで時がそこで途絶してしまい、別の時空から時間を引っ張ってきて繋いだかのようだ。徒歩でしか通つてはいけなはずの地下道をバイクで突っ切りながらサイドカ―で一人思う。

地下道を抜けると昨日のロータリーに出る。左手側のスターバックスで優雅な一時を過ごす人々が、私と、主に殷を見て目を開き、そして視線を逸らす。羞恥心はピンク色のヘルメットで嚴重に防御されているため大丈夫。

ゆっくりと走行するバイクの本車から殷が私の肩を突いた。「あれ」

くぐもった声につられて指さす方を見ると、そこには軍服姿の少女がいた。旧日本陸軍の士官服を身に纏っている少女がロータリーに見えた。取り巻きの男たちは軍服ではなかったが、そのほとんどは皆それぞれ己の持てる最大限の礼儀を以て少女の周りにいるようだ。

少女は眩しそうに手をかざすと、何事か呟いたようだった。取り巻きの男たちはそれを巫女の託宣を聞くが如き態度をとって、それがまた滑稽で、見ている人間にシリアスな笑いを供するようであった。

「トウドウさんだ」

殷は眼を細めて言う。フルフェイス越しにでも分かった。

少女はロータリーを回ってきた車に乗り込んだ。残念ながら車種

に疎いたためそれが何という車かは分からなかった。ただ、やけに縦長の車だ。回転するときなどぶつからないよう細心の注意を払わねばならないだろう。

「やっぱりお嬢様は違うな」

皮肉とも感嘆ともつかない調子で殷は言う。どちらも入っているのだろう。

二

二

この街は平衡状態にある。移民と純日本人のぶつかり合いが最も激しかった時期は教科書に載る程度に風化した。教科書は云う。移民一世と純血の日本人の対立と、今ある暴動とを比べよう物なら昔の方が酷かったと。私はそれを知識としてしか知らない。当然だ、生きていない時代を肌で感じるとい方が酷という物だから。その争いは血なまぐさく、白昼堂々死者が多数出たそうだ。今の暴動も死者は出る。だが、そこにイデオロギーや何かを突き動かす類の熱は存在しない。身を焼く炎は今や別種の物となつてしまった。不満のはけ口として手段が目的化された世界は、変わらず続いていく。その世界を外側から見つめたとき、内部の変化など何の専門家ともしれぬ知識人の云うとおり、一見何も起こっていないように見えるだろう。あるいは極相林としての世界とも見る人がいるかもしれない。私が何をして、何をしなくても、きつと外側の人間からはありふれた人生だと思われるだろう。梓の外側というのは元来そうであるように思える。どれほど精巧に出来ていたとして、それが小説であるならば人はどこか冷めた様子で、やっぱりな、その一言で全てを達観したつもりになるのだ。そう感じる。諦観ではない。肌感覚として知っている。いつか大人になつたとき、青臭かつたと思ひ返す日が来ることは、多分やつてこない。同じような連続の中で、だらだらと寿命を食いつぶすか、あるいはそれと知らぬうちに暴動の中で死ぬだろう。昨日の暴動でさえ死ぬきつかけとしては十分すぎるのだ。死は常に内側へと逆巻く力線であり人が抗うには強すぎる。太陽が眩しいから、という理屈は創作の中だけではないのだ。

バイクは中華街へと向かっている。修辭的に中華街と言ひ表すだけであつて、もちろんそこに住むのは日本人で、区別するなら大陸

の血脈にあたるかどうかの違いだ。あるいは中華系の思想を継ぐ者、あるいはファッションとして大陸の匂いを表そうとする人々。街の外観が中華街とそれ以外で違うことはない。ただ、雰囲気は違った。駅前や学校の近くとは決して同じ場所だとは思えない。水面に映し出された世界のように、似て非なる模造品のような。『ここでは着物を脱いでください』と『ここで、履き物を脱いでください』。いつだったかマス目の大きいノートに書いてあった文章を思い出す。全く馬鹿げた例文ではあったが今の状況も十分に馬鹿げている。殷がこちらを見た。バイクの速度は既に歩く速度よりやや速いだけとなっていた。漫然と絵の具をかき混ぜていただけのような景色が、急に焦点を結び始めたように思える。思索の海にたゆたううちに目的地へ到着したようだ。ヘルメットを外して久しく吸っていたいなかったと思える外気を吸い込む。何か生臭い臭いが鼻についた。中華街ではいつもそうだ。路地裏の吐瀉物とごみ箱から顔を覗かせる生ゴミ、中身がまだ少し残っているビール瓶、コンドーム。週に何度かの清掃で一目ではそれと分からないように偽装されたそれらは代わりに臭いで自らの存在を訴えかけているようだった。サイレントマジORITY、という言葉が頭に浮かんで、知らず一人苦笑する。殷がそれをめざとく見留、

「こつちに美味しいコーヒーを淹れてくる店が、」殷は路地に面したカフェを指さした。「あるんだけど」

多分何度も練習したのだろう。目の前を指してこつちもないだろう、小説のセリフみたいに気障な調子で云う。きつとコーヒーはブラックで、ハードボイルドな探偵はそれを啜りながら横目に調査対象でも見ているのだ。執念深い追跡とあばらの折れるアクション、安っぽいロマンス。けれど残念ながら私はコーヒーをブラックで飲めない。砂糖とミルクをたっぷり入れても笑われないような店だといいな、小声で呟いてみると、殷が眩しそうに目を細めた。彼のこつちの顔が私は好きだった。というよりも、こつちの虚飾の取れた無防備な表情を見るのが好きだった。年相応でなくともそれ

が自然であるようならば何でもいいと考えているのかも知れない。

空き缶や何かの食べ物であったら生ゴミが散らばる植え込みを跨いで歩道へ上がった。植え込みは未熟なアンブツシユ。隠蔽するには少々たけが足りない。殷はバイクを停めてくる、と路地の裏へバイクを押し去った。と、同時にカフエの中から男三人が外へ出てくる。一人は突き飛ばされた格好で、その後ろに二人が続いた。罵声はない。だからまだ殷は気付いていない。突き飛ばされた男がわざとらしくジャケットを払って溜息を吐いた。不思議と芝居じみている感じはなく、己という人間のステータスを全て把握しているようで、どこか超然としている風にも感じられた。顔を上げた男の顔に笑みが浮かんでいた。それが気に入らないのだろう、後から出てきた二人が男に云う。

「ヘラヘラ笑ってンじゃねえよ、お前、嗅ぎ回ってンのは知ってんだよ、あんまりふざけてつと」

「人聞きの悪い。私はただ何か不審な点があつたんじゃないかと聞いただけだよ。隠すことが無いのならそう云えばいいだろう」

子供を諭すような口調は彼らを世界から切り離していた。生徒と教師のロールプレイ。二人組は私がすぐ側にいることさえ気付いていないように見える。カフエの中でのやり取りは知らないが、事実、男の話術によつて、私の認識は『二人』から『二人組』へと平均化されて個性を失っていた。外部からの観察ですら男たちは己を失っているのだ。男は二人組のそう高くない沸点を見事に操っているように見える。あとはこんな三下なんかじゃなくもつと上位の人間を引っ張り出せば目論見を達成できる、そういう雰囲気は男からは漂っていた。

場の空気が僅かに振動する。暴動前の雰囲気とよく似ていた。体から発せられる怒気は現実に干渉するということを、私は今まで生きていた中で学んでいた。二人組が男へ躍りかかる寸前、

「イルマさん、待った？」

殷が路地の奥から歩み出てきた。こちらの状況など全く気付いて

いない声は、張り詰めた緊張を弛緩させるに十分な力を持っていた。二人組の拳から力が抜ける。今まさに行使されようとしていた両手が、ばつが悪そうにポケットへ入れられた。顔を横へ背け、誰かに対する言い訳が二、三語聞こえた。

「待ってない」

殷の方へ向き直って私は云う。これで暴力の気配は完全に消え去った。

「あれ、お前ら何やってんの？」

何も知らぬ素振りの殷へ二人組は、こいつが、と男の方を目で見やった。男はそれが合図のように懐へ手を伸ばして紙片を殷へ突き出した。

「私は一応こついう者で」

紙には名前と所属が書き記してあった。月刊パラドクスノ編集部長ノ森屋。連絡先のアドレスはありふれたアカウントだった。

森屋は私と殷の顔を交互に見る。浮かんだ笑みからは『好印象』という言葉以外出てこない。

「少し事件を調べていてね。この前亡くなった子のことを探っていると、どうも大陸系の少年グループに当たったっていうわけ。それでここまで来たんだけど……」

語尾を濁して二人組を見た。居心地悪そうに二人組は体を揺すった。

「こいつらが何か迷惑をかけたようなら謝ります。すみませんでした」殷が殊勝に謝っているところ見るなど思ってもみなく、私は少なからず驚いた。深々と下げられた頭はどのような思いで地面を眺めているのだろう。「お前らも謝れ」

「すみませんでした」

ふてくされたユニゾンが響く中、私は黙って男を見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2455o/>

アインザッツの不在証明

2011年4月18日02時10分発行